

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 6月10日現在

機関番号：11501

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010～2012

課題番号：22720262

研究課題名（和文） 清代モンゴル遊牧社会における王公支配と地縁結合

研究課題名（英文） The dominion of the royal family and territorial connections among Mongolian nomads in the Qing Period

研究代表者

中村 篤志（NAKAMURA ATSUSHI）

山形大学・人文学部・准教授

研究者番号：60372330

研究成果の概要（和文）：

本研究は、南北モンゴル各々の地域を事例に、清代から近代までに通底する遊牧社会の基層構造の解明を試みた。北モンゴルでは、ソム（佐領）が清朝の統治システムとして十分機能していなかったこと、南モンゴルでは、王公不在のフルンボイル地域における小規模な地縁集団「アイマク」の社会的機能を明らかにし、アイマクが1945年まで同地域の基層を規定していたことを解明し、今後の遊牧社会研究における、ひとつの通時代的モデルを構築した。

研究成果の概要（英文）：

This research project focused on understanding the basic structure of Mongolian local society from Qing Period to modern times. Through case studies of North Mongolia, it was verified that Sumu performed almost no function in the so-called Qing Dynasty system of control over Mongolian regional society. Through case studies of Hulunbuir area, it has verified that the social organization called Ayimag as territorial connections among nomads was functioned until at least 1945 years.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	700,000	210,000	910,000
2012年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,200,000	660,000	2,860,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・東洋史

キーワード：モンゴル、王公、地域社会、遊牧、地縁

### 1. 研究開始当初の背景

モンゴル遊牧社会の基層組織に関する先行研究は、主に文化人類学の分野で蓄積がある。特に、遊牧民世帯が複数集まって四季の牧地を共有する宿营地集団「ホト・アイル（qota ayil）」については、多くの研究がなされてきた。他方、歴史学の分野では、近年、清代の基本行政単位である旗（ホショウ）内で、王公タイジの親族集団（オトグ、バグ）

が土地や旗民を分け合い、地理的に旗を分割し割拠していた可能性が指摘されている。

両者とも、基本行政単位より下位のレベルで、遊牧民が構築した基層組織を論じている点で共通するが、文化人類学では、個別戸や宿营地集団レベルの問題に焦点が当たり、その外縁に広がる社会関係は十分に解明されたとはいいがたい。他方、歴史学では、王公タイジによる集団構成原理の存在が証明さ

れたのみで、その具体的な社会機能、あるいは清朝由来の行政組織との関係などが今後の検討課題であるほか、そもそも王公という要素を除いた社会関係については研究が及んでいない。したがって、清朝崩壊により王公タイジ層が消滅した近代以降との連続性や、あるいは清代でも、王公が不在の地域における社会関係などが未解明のままであり、今後、通時代的・地域横断的な社会像を構築する上で大きな課題と言える。

そもそも、清代や近代を問わず、モンゴル遊牧社会に関する一次史料の大部分は行政文書の類であり、末端の社会関係を解明するには質量とも十分でない場合が多い。このような史的制約をいかに克服するかが、研究の大きな前提条件となる。

無論、単に史料を博捜し事例研究を重ねれば解決するわけではない。上述の如く、ミクロな「ホト・アイル」の世界の外縁に広がる遊牧社会固有の広域的な社会関係の解明、さらに、それら広域的な社会関係と時々の行政組織との関係性、前近代と近代の遊牧社会に通底する連続性の解明など、広大なモンゴル地域における地域差・多様性を論じる上でそもそもその前提となる問題が十分整理されているとは言いがたい。

## 2. 研究の目的

以上の問題意識から、本研究では、まず「ホト・アイル」より上位で、かつ行政単位未満の社会レベルにおいて、モンゴル遊牧民がいかなる社会関係を構築していたのか、その具体像および編成原理の特徴を解明する。その上で、かかるレベルにおける社会関係が、清朝、中華民国、満洲国といった時々の広域的行政組織といかに影響し合いながら、通時代的に社会の基層を規定していたかを検証する。

具体的には、以下の2つの課題を中心に研究を進める。第一は、漠北モンゴルを対象に、清朝治下のモンゴル遊牧社会において、清朝の統治制度とは別に基層社会を規定していたとされる王公タイジの血統分枝集団「バグ」に関する先行研究を発展させ、王公を軸とする社会統合の在り方と、清朝が敷設した行政制度や組織との関係を明らかにする。

第二は、かかる漠北の研究結果と対照するために、漠南モンゴル・フルンボイル地域の新バルガ族を対象に、先行研究では全くふれられてこなかった地縁的集団「アイマク」を取り上げ、王公不在地域における地域結合の在り方、その地域結合が清末から近代にかけて、いかに地域の基層社会を支え、時々の行政組織といかなる関係を切り結んだかを解明する。

双方の研究結果を接合することで、従来研究を包括する新たなモンゴル遊牧社会史像

の構築に寄与できると考える。

## 3. 研究の方法

第一の漠北モンゴルに関する研究については、申請者はすでにトシェート＝ハン部左翼後旗の文書を用いた社会研究を積み重ねており、その延長線上に本研究を位置づける。具体的には、モンゴル国におけるモンゴル語一次史料の収集・分析を進め、末端行政単位における社会構造を分析しつつ、さらに加えて、清朝中央レベルの行政文書を用いて、清朝が末端社会の構造をいかに認識し、いかなる方針を取っていたのかを、具体的事例に即して検討を進める。

第二の漠南モンゴル・フルンボイル地域の研究については、現地の古老を対象とした聞き取り調査や、現地の地理調査をおこない、併せて、モンゴル語（現地の地域史や回想録）や日本語（主に満洲国時代の行政文書・回想録）で書かれた文献史料と相互に比較参照しつつ検討を進める。

また本研究では、歴史学的アプローチを軸にしながら現地調査を組み合わせ、清代史研究にとどまらず近代史研究や文化人類学研究など周辺の研究分野の成果も組み込んでいくため、主題となる地域内社会関係の研究成果以外にも、先行研究全体の総括と問題点の整理および本研究と先行研究との手法の違いや本研究の意義など、研究史をサーヴェイする報告を国内外で広く発表し、近接領域の研究者との情報共有や問題意識の共有化を図る。

## 4. 研究成果

本研究の主たる成果は以下の2点である。

まず、漠北モンゴル社会に関する研究成果として、従来から取り組んでいたトシェートハン部左翼後旗の社会分析が挙げられる。同旗において、王公タイジの血統原理に由来するオトグ・バグ組織と清朝由来の行政組織であるソムがいかに関わり合っていたかを検討した。

従来、ソムは清朝中央に管理され、主に兵役などの軍事的義務を負う組織と考えられてきたが、実際に清朝が比丁冊で管理していた人数はソムの一部に過ぎず、清朝への義務（アルバ）も、ソムとタイジという身分の別なく、旗民全体で負担し合う状況にあった。盟や理藩院でもこの状況を認知していたが、アルバの円滑な遂行を優先させ事実上黙認していた。

該旗では、ソムもタイジも基本的には同じくアルバを負担していたが、アルバ分配冊を詳細に分析すると、ソムだけが特別に負担するアルバが存在した。それは、派遣使者への随行や外地駐屯者への物資運搬などの徭役であった。つまり左翼後旗では、清朝が本来

ソムに期待した役割とは異なる義務をソムに負わせていたのであり、旗独自のルールに沿ってソムを再定位し、旗行政を運営していたことになる。

しかし、このような王公タイジが主導する独自の地域統合については、今後なお検討する余地がある。王公タイジは、社会における支配者層を形成してはいたが、たとえば左翼後旗では、旗長（ザサグ）と協理タイジだけで、旗民の半数近くを所有するなど、清朝中央と直接関係を有する一部の特定家系と、その他一般のタイジとの間には相当な格差が広がっていたと考えられる。

無論、清朝もこのような少数の特定家系に地域行政を全て任せていたのではなく、彼らを掣肘する（あるいは彼らに対する求心力を維持する）何かしらの措置を講じていたと考えられる。今後は、清朝とこれら特定家系との関係性を、具体的に両者が接触する場面に即して分析し、最終的に両者の関係が末端遊牧社会の秩序形成にいかん作用するかを注意深く論じる必要がある。

第二のフルンボイル地域に関する研究成果として、同地域の新バルガ族では、基本行政単位の下に「アイマク」と呼ばれる地縁的組織が形成されていた事実を明らかにし、そのアイマクの社会的機能や歴史の変遷を明らかにした。

当該地域におけるアイマクとは、主に夏营地の特徴的ランドマークによって弁別される地縁的組織で、10-30戸ほどで構成される。主に冬季の頻繁かつ広範囲な移動を相互に扶助することを目的とし、当該地域の自然環境と生業形態に根ざした、世帯を越えた広域の協業組織として機能していた。このアイマクは概ね清末から1945年まで存在したことが確認され、統治主体がめまぐるしく入れ替わる激動の時代にあっても、常に社会の末端で人々を束ねる基層組織として機能したことが確認された。

フルンボイル地域におけるかかる社会的結合の存在は、従来議論されてきた王公を軸とする地域統合のさらに下位に、自然環境や生業形態に根ざした社会関係のまとまりが存在した可能性を示唆する。

本研究によって、王公を軸とする社会結合と、遊牧生活に根ざした地縁的結合それぞれの在り様が明らかになった。前者については事例研究が蓄積されつつあるが、後者は従来ほとんど研究されてこなかった問題であり、文化人類学など周辺領域とも密接に関わる問題である。今後、本研究をひとつのモデルとして、モンゴル遊牧社会における社会的結合の在り方とその歴史の変遷について、諸地域・諸分野の事例と比較しながらさらに研究を進める可能性を得た。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計5件）

①中村篤志「モンゴル王公の乾清門行走——光緒年間モンゴル語日記史料の分析から」新宮学編『近世東アジア都城史の諸相』白帝社、2014年刊行予定。

②中村篤志「清朝とモンゴルの相互認識～清朝宮廷儀礼を手がかりに」高麗大学韓国史研究所『国際シンポジウム“東アジア歴史の実体と新しい清史研究の方向を探る”』、査読無、2012年、117-129頁。

③中村篤志「清朝治下モンゴル社会におけるソムをめぐって——ハルハ・トシェートハン部左翼後旗を事例として」『東洋学報』、査読有、第93巻第3号、2011年、1-25頁。

④中村篤志「書評：佐藤憲行著『清代ハルハ・モンゴルの都市に関する研究——18世紀末から19世紀半ばのフレイを例に』」『満洲史研究』、査読無、第10号、2011年、109-112頁。

⑤中村篤志「北京值班モンゴル王公の日記について」（モンゴル語）CNEAS Report, 査読無、vol. 2, 2011年、84-89頁。

〔学会発表〕（計8件）

①中村篤志「清朝とモンゴルの相互認識——清朝宮廷儀礼を手がかりに」国際シンポジウム「東アジア史の実体と新しい清史研究の方向を探る」、2012年10月19日、韓国高麗大学

②中村篤志「モンゴル遊牧社会の地域小集団をめぐって——フルンボイル地域のアイマクを事例に」日本モンゴル学会春季大会、2012年5月19日（於：昭和女子大学）

③中村篤志「清代モンゴル研究と日記史料——モンゴル王公の北京日記を中心に」東北アジア研究センター共同研究「北アジアにおける帝国統治の遺産に関する研究」平成23年度研究会、2012年3月21日（於：東北大学東北アジア研究センター）

④中村篤志「清朝宮城空間とモンゴル王公」近世東アジア比較都城史研究会第4回研究会、2011年6月26日（於：山形大学人文学部）

⑤中村篤志「近年のモンゴル研究の動向と日記史料の可能性について」中国社会科学院民族学与人類学研究所学術交流会、2011年3月

10日（於：北京市中国社会科学院民族学与人类学研究所）

⑥ 中村篤志「清朝治下モンゴルにおける兵役・賦役について」軍隊と社会の歴史研究会第28回例会、2010年12月4日（於：山形大学人文学部）

⑦ 中村篤志「清朝宮廷儀礼におけるモンゴル王公の位置づけ」東北アジア研究センター共同研究「北アジアにおける帝国統治の遺産に関する研究」平成22年度第一回研究会、2010年7月3日（於：東北大学東北アジア研究センター）

⑧ 中村篤志「モンゴル都城研究の諸問題——カラコルムを中心に」近世東アジア比較都城史研究会第3回研究会、2010年6月26日（於：山形大学人文学部）

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

中村 篤志 (NAKAMURA ATSUSHI)

山形大学・人文学部・准教授

研究者番号：60372330